

**【資料1 自転車と歩行者の接触事故】**

	平成 16年	平成 17年	平成 18年	平成 19年	平成 20年	平成 21年	平成 22年	平成 23年	平成 24年	平成 25年	平成 26年
歩行者との 事故	2,543	2,617	2,783	2,869	2,959	2,946	2,770	2,806	2,625	2,605	2,551
自転車事故 全体	188,338	183,993	174,469	171,169	162,662	156,485	151,681	144,058	132,048	121,040	109,269

(「警察庁 交通事故の発生状況について 平成26年」による)

**【資料2 自転車事故を防ぐための対策メモ】**

- 1 自転車は車道の左側を走る。(歩道の自転車走行は例外)
- 2 歩道は歩行者優先を心がける。
- 3 交差点などではとくに周囲に気を配り、安全を確認する。
- 4 安全ルールを守る。(飲酒運転の禁止、二人乗りの禁止、夜間のライト点灯、信号を守るなど)
- 5 走行時にヘルメットを着用する。

**問2**

翼くんの学校では、交通安全についての講演会が行われました。その後、学級委員会で交通安全についてのポスターを作ることになりました。【資料1】、【資料2】と【ポスター】を参考にしながら、後の問い合わせに答えなさい。

- (例) △○成 △合 ○変 ↓ 答え 集大成
- ① △一〇が吹いた
- ② 君がいれば百△〇だ
- ③ 彼はまだ△二〇だ
- ④ ついに千△〇をむかえた
- ⑤ 五△〇をあつめではやし最上川
- |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| △ 满 | △ 中 | △ 空 | △ 間 | △ 風 |
| ○ 梅 | ○ 音 | ○ 努 | ○ 号 | ○ 能 |

問1 次の①～⑤の文中の三字熟語の△と〇には、下の二字熟語の△と〇と共に漢字が入ります。当てはめてできあがった三字熟語を解

答らんに書きなさい。

次の各問い合わせに答えなさい。



一一

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（抜き出しの場合には句読点や記号も一字に数えます。）

今日私たちの用いる知的能力の量は過去よりも少ないとも多いとも言えます。それに、昔とまったく同種の能力を用いているわけでもありません。たとえば、感覚的知覚の利用はあきらかに少なくなっています。『神話論』の初稿を執筆中に、ひじょうにふしぎな問題にぶつかりました。真昼間に金星を見る事のできるとくべつな部族があるらしいのです。それは私にとってはまったく不可能な信じられないことでした。天文学のセンモンカにたずねますと、もちろん私たちは見えないが、真昼間に金星のハナツ光の量を知れば、ある人びとには金星が見えるというのもまったく考えられないことではない、という返事でした。それから、西欧文化圏の航海術についての古い本をいろいろ調べてみました。するとやはり、昔の船乗りたちは真昼間に金星を見る能力をかんせんにソナえていたらしいのです。おそらく私たちも目を訓練すれば今までそうできるのでしょうか。

植物や動物についての私たちの知識についてもまったく同じです。無文字民族は自分たちの環境とシゲンのすべてについて、途方もなく正確な知識をもっています。こうしたものすべてを私たちはうしなってしまったのですが、その代償として何も得なかつたわけではありません。たとえば、どのしゅんかんにもおしつぶされる危険性があるのに、そういうこともなく自動車を運転できるし、夕方にはテレビやラジオをつけることもできます。それには知的能力の訓練が必要ですが、「未開」民族は必要がないためそういう能力をもちません。潛在能力としては精神の性質を変えることもできたはずですが、この人たちの生活様式と自然との関係から見ると、その必要がないのでしょうか。人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によつて異なります。それだけのことです。

いろいろの地域に住む人類が異なる文化をもつにもかかわらず、人間精神はどこでも一つで同じであり、同じ能力をもつ、というのが、人類学研究の数多くの結論の一つでありましょう。それは現在どこでもうけいれられている結論だと思います。

それぞれの文化が体系的組織的に他と異なるようにつとめたとは思いません。事実はこうです。何十万年のあいだ地球上の人類はあまり多くなくて、小さな集団がばらばらに住んでいました。したがつて、各集団がそれぞれの特徴を発展させ、他と異なるようになつたのはごく当然のことです。なにも意図してそうなつたではありません。たんに、ひじょうに長い期間支配的だつた諸条件の結果にすぎません。

さて、この状態がそれじたい有害であるとか、そういう相違は克服されるべきであるとは考へないでいただきたいのです。事実、相違とはひじょうに豊かな力をもつものです。進歩は、相違をとおしてのみなされてきました。現在私たちをおびやかしているものは、オーヴァー・

- (1) 空らん  ア  と  イ  にあてはまる言葉をそれぞれ答えなさい。※  ア  には二か所とも同じ言葉が入ります。
- (2) 空らん  \*  にあてはまる内容を、二十字以内で答えなさい。
- (3) 交通安全ポスターの一番下にある「交通安全標語コンクール」にあなたも参加することになりました。次の条件にしたがつて標語を作成しなさい。

《条件1》【資料2】の1～5の中から一つ選んで、それに関する標語とすること。

《条件2》表現方法は川柳（五・七・五）の形式をとること。字あまり・字たらずは認めない。

**【ポスター】**

### 自転車事故をなくそう

平成16年とくらべて、今年の自転車事故は  した  
が！

歩行者との間での事故数は  していない  
つまり

自転車と歩行者の事故の割合は  イ している！

◎自転車は車と同じ、危険がともなう乗り物です！

### 自転車事故をふせぐための対策

- 交通ルールを守ろう。
  - ① 2人乗りをしない
  - ② 暗くなったらライトをつける
  - ③ 信号を守る
- 自転車は車道の左側を走ろう。
- 歩道を走るときは歩行者優先を心がけよう。
- 自転車に乗るときはヘルメットを着用しよう。
- \*

**交通安全標語コンクール開催！**  
ぼくたちの町の安全を守るために標語を募集します。  
くわしくは学級委員会まで！

「コミュニケーション」とでもよびうるものでしよう。

A

、世界のある一点にいて、世界の他の部分で何が行われているかをすべて正確に知りうるようになる傾向です。ある文化が、真に個性的であり、何かをうみだすためには、その文化とその構成員とが自己の独自性に確信をいだき、さらにある程度までは、他の文化に対しても優越感さえいだかねばなりません。その文化が何かをうみだしうるのはアンダー・コミュニケーションの状態においてのみなのです。私たちはいま、たんなる消費者になり、世界のどの地点のどの文化から得られるどんなものでも消化できるけれども、独自性をすっかりうしなつてしまふのではないかという展望におびやかされています。

地球上いたるところ、ただ一つの文化、一つの文明だけになる時代を私たちはいまや容易に想像することができます。B 私は実際にそうなるとは信じません。対立する傾向——一方は均一化へ、他方はあらたな個別化へ、という傾向がつねに作用するからです。文明が均一になればなるほど、分離しようとする内的な傾向がはつきりしてきます。また、あるレヴェルで得られるものが、ただちに他のレヴェルでうしなわれます。これは個人的印象であり、この弁証法的作用についてはつきりした証拠があるわけではありません。しかし人類がほんとになんらかの内的多様性なしに生きうるとは思えないのです。

(クロード・レビューストロース／大橋保夫訳『神話と意味』より)

\* 作問の都合上、文章の一部を改変しています。

\* 「未開」民族……筆者は「未開民族」という呼び方を適切ではないと考えるため、「無文字民族」という言葉を使用している。そのためここではあえてかつこ書きされている。

\* オーヴァー・コミュニケーション……「オーヴァー」は超過の意味。「コミュニケーション」は社会生活を営む人間が言語などを介して意志の疎通を図ること。この後にある「アンダー」は「オーヴァー」の逆の内容をさす語。

\* 弁証法……対話術、問答術を意味する。

問1 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

質問

私たちの多くは自分の知的能力の一部しか用いておらず、残りの能力は完全に閉め出されているそうです。今日の私たちの生活では、先生が書いておられる、神話的様式で思考した人々にくらべて、私たちは知的能力の使い方が少ないとお考えですか。

(1) この質問に対して筆者はどのように答えていますか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

(2) 答者が(1)のように考えるのはなぜですか。本文中の言葉を用いて七十字以内で答えなさい。

問3 傍線部①「真昼間に金星を見る」とありますが、そのためには何が必要ですか。次の【説明文】の空欄にあてはまる言葉を本文中から五字で抜き出して答えなさい。

【説明文】 を使う」と。

問4 傍線部②「この人たちの生活様式と自然との関係から見ると、その必要がないのでしょうか。」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無文字民族の人々には知的能力の訓練をする場所が提供されなかつたから。
- イ 無文字民族の人々は植物などの知識についてすでに訓練して身につけているから。
- ウ 無文字民族の人々には変化させることができるものとの精神の性質がないから。

問5 傍線部③「そういう相違」とはどのようにして生じましたか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文化の作り手一人ひとりが、自分たちの文化のよさを認め合うことによって生じた。

イ 他の文化について積極的に学んで、自他の違いを強調する工夫をしたことによつて生じた。

ウ 他の文化と長い間接する機会をもたなかつたため、それぞれの文化が独自の発展をして生じた。

エ 文化を統一しようという動きに対し、人々が反対する作用が働いたために生じた。

問6 本文中の空らん  A ·  B にあてはまる語句として適切なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ また ウ だから エ でも オ ところで

問7 次の【文章A】は江戸時代の日本の文化について書かれています。本文中で筆者は、現在のわたしたちはこれと逆の状況にあると考えていますが、それを表す最も適切な一文を本文中から探し、はじめと終わりの五字を抜きだして答えなさい。

### 【文章A】

『水滸伝』に象徴されるように、江戸時代の人々は、中国の文化を使つて日本の文化をつくり、あるいは活気を得ていました。枚挙のいとまがありませんが、中国の白話(話し言葉)短編小説を使つた上田秋成の怪談小説『雨月物語』は、近代文学にも大きな影響を与えました。

(田中優子『グローバリゼーションの中の江戸』より)

### 三

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(抜き出しの場合には句読点や記号も一字に数えます。)

はじめておとずれた青空運動公園には、野球場と球技場があり、敷地のなかほどには芝生が広がっていた。緑色の高いネットフエンスにかこまれた球技場では、ユニフォーム姿のおとなたちがサッカーの試合をしていた。緑の多い園内には、施設をぬうようにクツシヨンのきいたジョギングコースが整備されている。和彦と颯太は、その道を芝生の広場にむかつていそいだ。

「こいつは、貸し切りじゃないか!」

ほとんど人のいない広場の芝生を見て、和彦はさけんだ。

「やっほー!」

颯太ははやくも得意のドリブルで走つていく。

さつそく上着をぬいで、和彦は颯太とボールを蹴りはじめた。薄茶色に冬枯れした芝生には、ところどころ白詰草がパツチワーケのよう<sup>ウ</sup>に生えていたが、とても気持ちがよかつた。家からすこし距離があるものの、毎週ここへ来ようと和彦は決めた。

しばらくすると、公園内のジョギングコースを一台の軽トラックがのろのろとやつてきて、ふたりに近い場所でとまつた。どうやら公園の管理事務所の車らしい。首にタオルをまきつけた作業服姿の男が、ドアを開けておりてきた。モスグリーンの長靴をはいた年配の男だった。風貌がどこかマンションの管理人に似ていた。

「入口の看板見ませんでしたか? ここはサッカーなどの危険なスポーツは禁止です」

男は腰に手をあてて言った。

和彦の足元をボールがとおりすぎていく。ボールを蹴った颯太は、ばつが悪そうにうつむいてしまつた。

「子供とボールを蹴つてるだけですよ」

「危険ですから」

「危険つて、周りにだれもいないじゃないですか?」

<sup>①</sup>「あなたたちだけ、特別に認めるわけにはいかないんです」

「和彦は外国人のように両手をおおげさに広げてみせた。」

「言葉づかいはていねいだが、男の声にはいらだちがにじんでいた。こう言われたら、善良な市民であれば、さつさと引き下がるものなの

だろうか。無意識のため息がもれた。

「サッカーならね、専用グラウンドがあるから、そちらでやつてください」「それって、あそこのことですか？」

和彦は緑色のネットフェンスにかこまれた球技場を指さした。

「そう、毎月抽選ですけどね」

男は平然と言つてくれる。

どういう感覚をしているのだろう、と思う。親子ふたりでサッカーをするのに、グラウンドを一面借りろというのだろうか。それともたんなるいやがらせなのか。

③「本気で言つてるんですか？」

「規則ですかね」

「でも、だれもいないし、気をつけますよ」

「だから看板を見てくださいよ。『危険なスポーツ、野球やサッカーは禁止』って、ちゃんと書いてあるでしょ。決まりなんです」

「でも、サッカーツึついたって……」

和彦はそのときサッカーのルールブックにある条項を思い出していった。

サッカー競技規則第三条競技者規則。

『試合は十一人以下の競技者からなる二つのチームによつて行われる。チームの競技者のうちの一人はゴールキーパーである。いずれかのチームが七人未満の場合は試合を開始しない』

親子でボールを蹴り合うのも、サッカーというのだろうか？

「それ、サッカーボールでしょ？ あなたどこのクラブの方ですか？ あんまりしつこいと、おたくのクラブ、こここの球技場を使えなくするよ」

男はそう言つと、軽トラックにもどつていった。

芝生の上を I とふたりで歩いた。広場に人の姿がすくない理由がわかつた気がした。

軽トラックはすぐには発車しなかつた。たばこをすいながら、和彦たちが立ち去るのを見張つているようだ。<sup>\*</sup>管理職になれない自分は、管理人との相性<sup>あいじょう</sup>はすこぶる悪そうだ。和彦はくちびるの端<sup>はし</sup>をゆがめて自嘲<sup>\*じちよう</sup>した。

「いこう」

つぶやくと、颯太はだまつてついてきた。

芝生の上を I とふたりで歩いた。広場に人の姿がすくない理由がわかつた気がした。

わざわざ車でやつてきて、駐車料金まで払つたというのに、このごまだ。どうやらここへは、市民にはあまり来てほしくないらしい。芝生を管理する人間は、芝生がいたむのが迷惑なのかもしれない。じゃあ、この芝生はいつたいなんのために植えたんだ。ベンチに座つてながめている、とでも言うのだろうか。規則、規則と言つけれど、それだけ拘束力のある看板の言葉を、いつたいいつだれが決めたのだろうか。二度と来るものかと思つた。

夕暮れが近くなつたせいか、公園には犬を散歩させている人の姿が多くなつていた。ふたりが広場を横切つて歩いていくと、白い服を着せた胴の長い茶色い犬を、老夫婦がつれていた。犬は首輪をしていたが、リードを解かれていた。飼い主がボールを投げると、嬉々として追いかけては拾つてきた。犬は何度もそれをくりかえし、それこそ自由に芝生の上をかけまわつていた。

——うちの息子は、犬以下かよ……。

和彦は心のなかでつぶやいた。もう怒る気になれなかつた。

駐車場に看板が立つていた。

## 子供は地域の宝物

④思わず笑いそうになつてしまつた。

「ごめんな、颯太」

車に乗り込むと、和彦はうなだれて言つた。

(はらだみずき『ホームグラウンド』より)

※ 管理職……会社などで、ある部門の業務に責任を負う立場の人。

※ 自嘲……自分自身を軽べつすること。

問1 傍線部ア～工の漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「和彦は外国人のように両手をおおげさに広げてみせた」とありますが、この行動についての説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ほとんど人のいない広場で息子と二人でサッカーボールを蹴っているだけであり、周囲への危険はまったくないはずだということを、強く主張している。

- イ ボールを蹴っているのは息子と自分の二人だけであり、これは正確にはサッカーといえないのではないかと、颯太のかわりに文句を言っている。

- ウ サッカーなどの危険なスポーツは、周囲にだれもないこのようないい廣場でこそ気がねせずにできるものであるという、自分の考えを大げさにアピールしている。

- エ サッカーや野球などができる広い公園内の芝生の広場は、自分の家の周りにはいつさいなため、なんとかここを使わせてほしいと管理人に必死に頼んでいる。

問3 傍線部②「善良な市民」とありますが、ここでの「善良な」に最も近い意味の言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 陽気な イ 知的な ウ 健康な エ 徒順な

問4 傍線部③「『本気で言つてるんですか?』」とありますが、この発言からわかるこのときの和彦の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 遠くから遊びに来ている自分たちに対して、専用グラウンドを借りるための抽選に毎月参加するように命令する管理人の男に対し、怒りを感じている。

- イ サッカーボールを蹴つて遊びたいだけの自分たちに対して、専用グラウンドを借りなければならぬという管理人の男の、感覚を疑っている。

- ウ サッカーボールを蹴つて遊ぶだけでも、抽選で専用グラウンドを借りなければならぬという管理人の男の説明を真に受けて、不安になつてている。

- エ 自分と颯太がしんけんにうつたえているにも関わらず、その気持ちに気づけずに冗談ばかり言つてゐる管理人の男に対して、あわれみを感じている。

問5 本文中にある空らん I に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア すたすた イ のろのろ ウ おずおず エ とぼとぼ

問6 傍線部④「思わず笑いそうになつてしまつた」とありますが、それはなぜですか、和彦の心情をふまえて説明しなさい。

問7 管理人の立場から、和彦たち親子の広場の使用を認められない理由を説明しなさい。

《条件1》本文の内容をふまえて根拠を二つあげること。

《条件2》七十字以内でまとめること。

平成二十八年度 土浦日本大学中等教育学校 一般入試〔第一回〕解答用紙

國語

受 驗 番 号
氏 名

問 2			問 1
③	②	①	①
ア			一
			②
イ			百
			③
二			一一
10			④
千			千
			⑤
五			五

二二

問 7	問 4°	問 3	問 2	問 1
			(2)	(1)
		問 5		
5				
		使うこと。		
	問 6			
A				
			70	50
B			30	10
			60	40
			20	

三

問 7	問 6	問 2
70	50	30
		10
60	40	20

便  
記

100

平成28年度 土浦日本大学中等教育学校（国語）

解答・解説

解答

問一 ① 春(二)番 ② (百)人力 ③ 青(二)才 ④ (千)秋樂 ⑤ (五)月雨

2) (1) ① 春 (二) 番 ② (百) 人力 ③ 青 (二) 才 ④ (千) 秋樂 ⑤ (五) 月雨  
 ア 減少 イ 増加

(3) 歩道では歩行者優先 守ろうね

ア 専門家 イ 放ウ ウ 備 イ 資源

(2) (1) 少ないとも多いとも言える。  
人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発」とはできず、「いく小さな一部を使用しうるのみで、二問

問三 感覚的知覚 どの部分を用いるかは文化によつて異なるから、

ウイ

問六  
問七  
私たちはい  
て い ま す。  
A ア  
B ブ  
C イ

ア  
しきち

ア

イエ

工

「子供は地域の…

## 公園内の芝生の上

に例外を認める

解說

問二 (2) 続く文章で「人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によつて異なります」と説明されて います。

「子供は地域の宝物」という看板を見た和彦は、公園内の芝生の広場でサッカーボールを蹴るだけのことも子供に許そうとしない公園の管理人の態度を思いだし、矛盾を感じて笑うしかなかつたのだと考えられます。

問六 「子供は地域の宝物」という看板があるので、子供が公園の芝生で自由にサッカーボールを蹴ることも許されないという矛盾が笑えるから。公園内の芝生の広場では、サッカーなどの危険なスポーツは禁止という規則があり、和彦たちにだけ特別に例外を認めるわけにはいかないから。